

種蒔時候之事

種を蒔時候ハ、八十八夜前後、見合て蒔べし。

其國所の寒暖・氣候にて早きをよしとし、遅きをよしとする所あり。おくれたるハ五月初頃より夏至前迄ハ蒔てもよし。遅蒔にても木ハ榮ゆれども、桃の付方少く、秋にいたりふききらずして、取め甚少し。早きハ大風又ハ秋の雨統く事ありてものがるゝ事あれば、はやく蒔て肥料をぬけめなくする時ハ、利を多く見るものなり。土地によりての遅速ハ、次に記す諸國の氣候に見合まくべし。

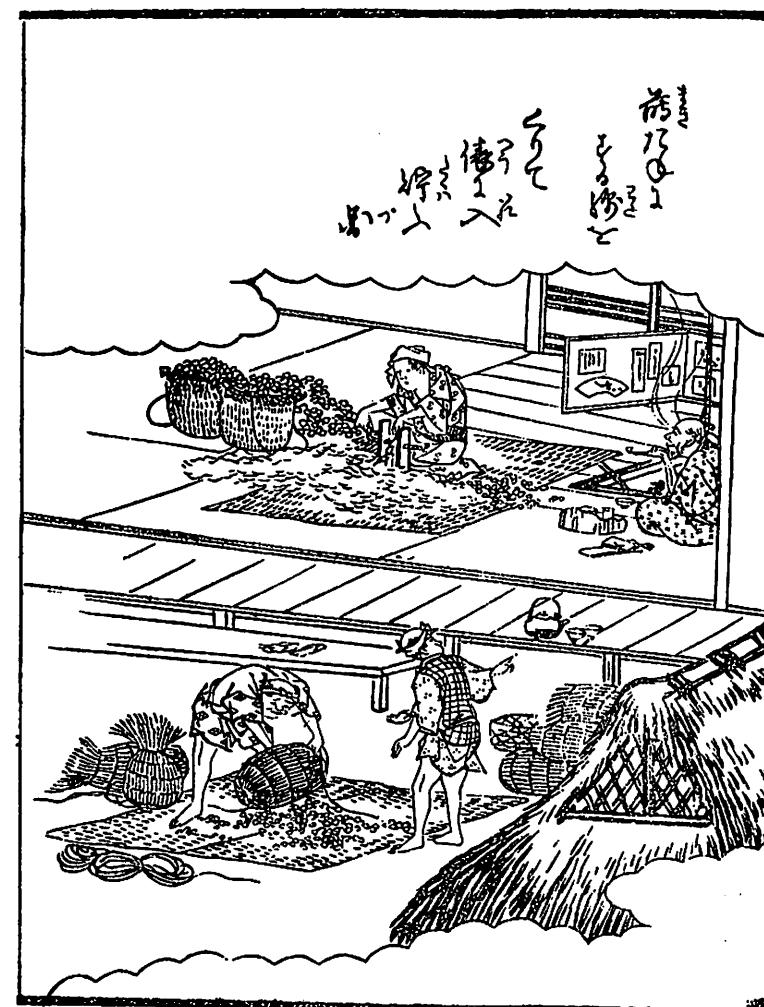
(1) 八十八夜 立春より八十八日目で陽曆の五月一日ころにあたる。関西ではこのころに晩霜がおさまるので、昔から現在まで幼苗が霜に弱い作物の移植または播種期の目途とされている。

地こしらえ様の事

締を蒔ハ多く麦を作りたる跡がよし。蒔時分

整地、作条の仕方

締を蒔くには、多くのばあい、麦をつくった跡がよい。蒔く時期は、



蒔たねにする締を
くりて俵二入、時
ふ図

ハ未だ麦の刈旬に至らざれば、麦の根によせて
蒔事也。拟綿のふとり栄ゆべき地ならば、先妻
を時に、畦を一尺七八寸より武尺に切て蒔べし。
又撰州辺の畑にてハ一面に地ならしして、其畑
の向ふと手前に、貳尺二寸に印を付、是に水綿
をはり、其縄の根を目にして、小鍬をもつて
引通り／＼して筋を付、其筋の通りを二挺掛と
いふ準にて引べ、其筋を真中にして二筋の溝う
ね出来る也。此二タすぢのうねの間わづか七寸
あり。然して此切たる畦の上を足にてふみ付ゆ
く其跡より、麦を一行に蒔きて行、また土をか
けておけば、蒔たる通りにはえ出、追々成長し
て穂のいづる頃ハ、此巾七寸の行壱うねのこと
くに栄えなる也。

左に図することとく、其麦の両脇へ繩の種を蒔くのである。○また
おろすなり。○又かぶ蒔といふ蒔方あり。是ハ
早麦を作り、刈取て、その麦株をかなざらへに
てかき起し、地ならしして、畦を切、たねを入
るなり。

- (1) 地じしらえ 播種のための整地、作条など。 (2) 刈旬 刈取り適期。 (3) 水綿 測量に使う基準の縄。 (4) 二挺
掛 『農具便利論』の図、本書一九一ページ参照。 (5) かぶ蒔 麦の刈株を除去して畦立して蒔くこと。 (6) かなざらへ
「さらへ」(一六一、三六四ページの図) 刃部が金屬のもの。

種に分量^{たね}之事

壱反の畑に、凡目方貰五百目又ハ貰貰(五百目)、
地の肥瘠(へいせき)と切虫の考(かんが)へて、多少を論じ、蒔
べし。難もなき地ならば、多く蒔におよばず。

(1) 切虫 発芽した芽を切り倒す害虫。

種の分量

○貯(たね)へ置たる種子を取出し、水にて薙灰(わび)をと
き、夫にまぶす。又小便にて薙灰又ハ常の灰に
てまぶし、よくもみ合すれば、はらくと一粒
づゝに分るゝ也。是ハ種をくりたるまゝにてハ、

(1) 種子 捶^{たた}やう井時^{まち}やうの事

種の準備と蒔き方

妻の刈り取り以前に、麦の根に寄せて蒔くこと。緑のよく生長する土地
では、まず麦を時くときに、畦を一尺七、八寸から一尺ほどに切って蒔
くこと。また撰州近辺の畑では、一面に地ならしをして、向こう側と手
前に二尺二寸に印を付け、これに水綿を張り、その縄の根を目印にして、
小鍬で引き通り引き通りして筋をつける。その筋の通りを二挺掛けとい
う犁で引けば、その筋を真中にして二筋の溝と畦ができる。この二筋の
畦の間はわずか七寸である。そして切った畦の上を、足で踏み付けてゆ
く、その跡から麦を二条に蒔いて行き、土をかけておけば、蒔いたとお
りに発芽し、次第に生長して穂が出るころは、この幅七寸の条が一畦の
ようになると繁る。

左に図解するようだ、その麦の両脇へ繩の種を蒔くのである。○また
かぶ蒔という方法がある。早生麦をつくり、刈り取つて、その麦株を
「かなざらへ」でかき起し、地ならしをして、畦を切つて、種を入れ
るるのである。

○貯蔵してある種を取り出し、水で薙灰を落いたものにまぶす。また
は、小便で薙灰が普通の灰を溶き種をまぶし、それをよくもみ合わすと、
ばらばらと一粒ずつわかる。種を練つたまゝでは綿の毛が残つて殊數
つなぎになるが、灰をまぶすとばらばらと一粒ずつ分かれて、蒔き易く



麦の中へ綿を蒔、
地ならしして
綿をまく図



麦の中へ綿を蒔く図

綿の毛残りて珠数つなぎに成るもの故、灰をまぶせば、はらへと一粒づゝわかれ、蒔よきが故也。又爰に「術あり。先何灰にても水にて入てかき雜れば、能き実ハ沈ミ、惡敷實ハ浮ものなり。浮たるハ捨、沈ミたる分をとり、能まぶし、少し乾かし、桶に水を溜、其中へ入てかき雜れば、能き実ハ沈ミ、惡敷實ハ浮のなり。何灰にても水にても水にてもよろしてにまぶし、日に干、はらへとなりたるを、閑扇にて強くくり、一番の方へ出たるハ最上の種子なれば、是を蒔くべし。如此撰びたる種子ハ、常に壺反に壺貫五百目も蒔べき所に、五百目位にてもよろし。其故ハ随分うすく蒔ても上実ばかりなれば、根繁くさし、美しく勢ひよく並びてはゆれば、間引にあらへ引捨てべよろし。○畿内にて通例の蒔様ハ、先貯置たる種子を取り出し、小便にて糞灰をとき、種子をまぶし、よく手にてもみ合せ、一粒づゝはらへと成たる手籠に入、左の手にさげ、或ハ脇にはさみ、筋を切置たるに、片よりなく

なるためである。いま一つ良い方法がある。まず何の灰でもいいから灰を水に溶き、種をまぶして少し乾燥し、桶に水を溜めてその中へ入れてかき混ぜると、良い種は沈み悪い種は浮く。浮いた種は捨て、沈んだ種を取り出して灰（何の灰でもよい）にまぶし、日に干してばらばらとなつたものを唐箕を強くかけ、二番の方へ出たものは最上の種であるからこれを蒔くこと。このようにして選んだ種は、普通なら一反に一貫五百目も蒔くべきところを五百目くらいでもよい。なぜなら、大麥薄く蒔ても良質の種ばかりなので、根が豊かにつき整然と勢いよく並んで生えるので、間引く時には大ざっぱに引き捨てればよい。

○畿内での一般的な蒔き方は、貯蔵しておいた種を取り出し、小便で糞灰を溶き種をまぶし、よく手でもみ合わせ、一粒ずつばらばらになつたものを手籠に入れ、左手にさげるかあるいは脇にはさみ、筋を切ったところへ均等に蒔く。その蒔いた種の上に土を四、五分くらい足でかけて、その跡を軽く足で跡み付けるのである。ただし、湿っている埴土（ねばった土）は踏んではならない。「えぶり」で土をかぶせたままに

して置く。

○瘠せた土地ならば、切つた溝へ灰肥を敷くが、その外「肥肥」(刈草、木の葉、塵芥の類に屎尿などを混ぜ腐らせたものと、もしくは刈草などの腐敗したものと灰などを根に置くことを肥肥という。またはおき肥ともいう)を入れて蒔くこと。天候を見計らって、雨降りの日はもちろんのこと、雨の降りそうな空もようのときには蒔いてはいけない。また、蒔くころに日照りがあつて土地が乾燥しそぎているときは、水をやつておいてから蒔くことである。

はりりとまき、其時たるたねの上に、土四五分位足にて踏かけ、又其跡をかるく足にて踏付る也。但ししめりたる埴土へばへ踏へからず。ゑりにて土をきせたるまゝにて置へし。○瘠地ならば切たる溝へ灰肥をしくか、其はか肌肥ごもくに屎尿等を切ませくさらかしたると、或へごもくのくさりたるとはひとと根におくをはだこえといふ。またおきこえをもいれて、蒔べし。尤日和を見合ふりへもちろん雨氣の空にハ蒔べからず。又まく時分に旱して、地乾き過たるハ、水をそゝぎ置て後、蒔べし。

(1) 種子捨やう 播種前の種子に施す作業。綿のばあいは種子に付着する毛がもつれるのを分離させる作業をする。これを「毛もみ」または「毛まき」という。これはときやすくなると同時に、糞灰水で種子の油膿物を除き、吸水が促進され発芽を早める効用がある(原田重一郎『実験栽培棉編』)。(2) はらはら 「ばらばら」であろう。(3) 壺反に壺貫五百目 畿内の『村明細帳』によると、反当播種量は一貫五〇〇匁から一貫である。(4) あぶり 土を平にし、あるいは少量の土をよせ集める丁字型の器具。(5) 肥肥 種子に直接ふれる肥料・普通には灰に人糞尿をまぜたものを種子にまぶしつけて蒔く。



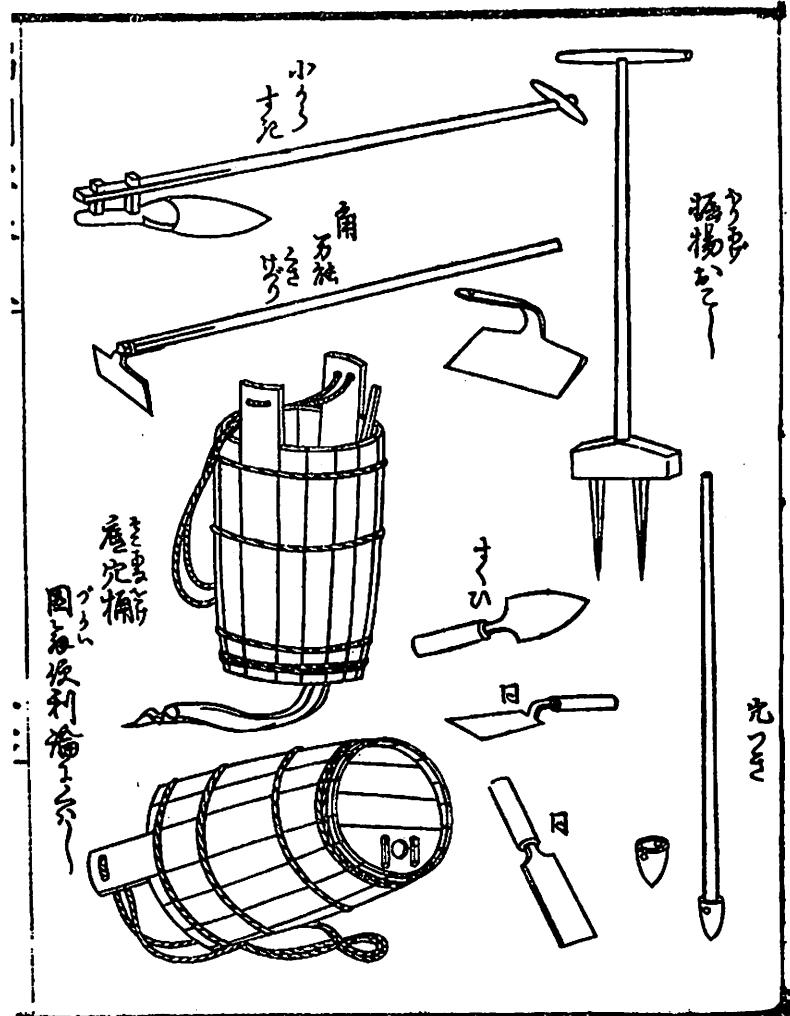
わたの根にてをのくはにて薄を引、
其ミぞへ水肥を入れる図
小生の根にてをのくはにて薄を引、
其ミぞへ水肥を入れる図

肥し手入の事

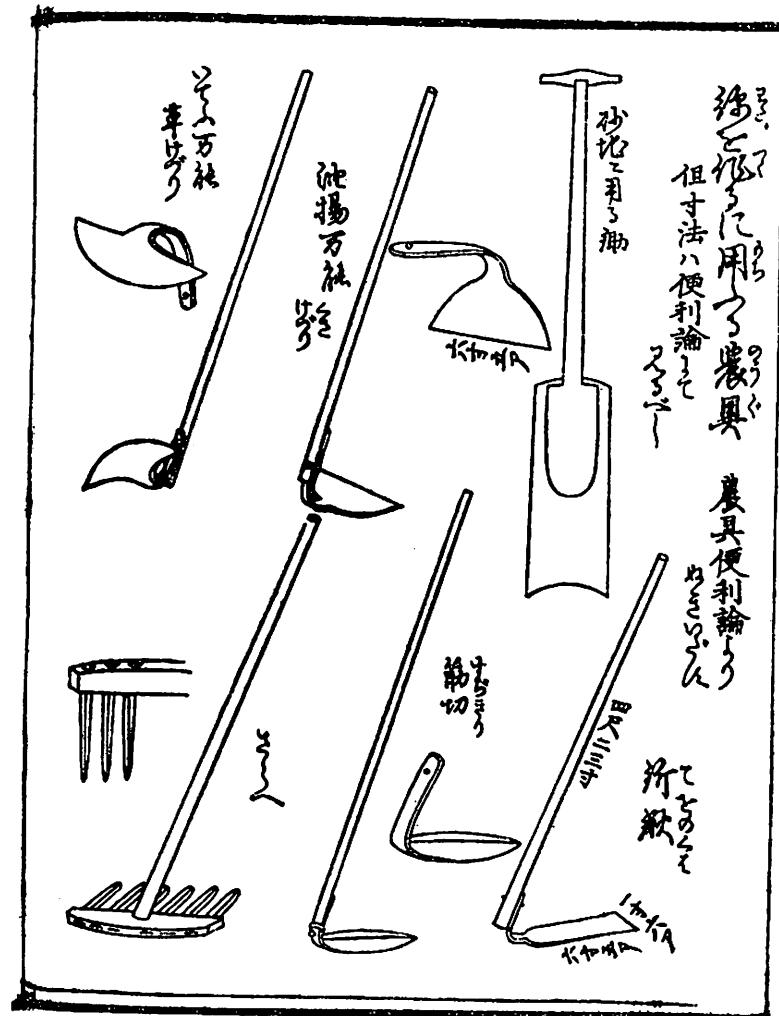
肥しの仕やうへ、田に作りたる綿も、畑に作られたる綿もさのみかハリたる事なし。先棒肥とて二葉に生摘ひたる時、棒をもて五寸程づゝ間を置、綿の根に寄、深さ一二寸程に穴をつきあけて行、其あとより油槽の粉、又ハ干にしたるをつまみ入れし。其後十四五日も過て、綿の根に寄て鋸鋏にて筋を引、水肥を入れし。尤肥を入れたらば、直に机にて土を覆ふべし。是を腹肥と云なり。凡肥しを施す事、夏の半過三度にて宜し一番肥に油かすを入らべ、二。余の作物と違ひ、肥しの入方おくれてハ、枝葉榮ゆる斗にて、桃の付方少なし。又秋に至り若がへるもの也。されども磧地にてふとり兼るならべ、色を見合て、其間にうすぎ肥を度々いたし、夏の半過たりとも、足はやき肥を用ゐる事もあり。惣て万の作りもの、肥しを肝要とする事もちろんなれども、

肥料の施し方は、田につくっている綿でも、畑につくっている綿でも、それほど遅いはない。まず「棒肥」といつて、二葉に生え揃つているときに、棒を持って五寸ほどの間隔を置いて、綿の根元へ寄せ深さ一、二寸ほど穴を突きあけ、そこに油粕を粉にしたもの（または干糞を用いる）を入れる。十四、五日後に綿の根に寄せて鋸鋏（三六四ページの図参照）で筋を引き、「水肥」を入れる。肥を入れたら、すぐに「えぶり」で土をおおうことである。これを「腹肥」という。肥料を施すのは、夏の中ごろまでに三度ほどでよい（一番肥に油かすを入れたら、二番肥には干糞、三番肥は見合せてから入れること）。他の作物と違い、肥料を入れる時期が遅れるとなれば葉が繁るだけで、実の付き方が少ない。秋になるとがえるのである。しかし石ばかりで肥料分の乏しい土地のために生長しにくいときは、綿の木の色を見て何度も薄い肥を入れて、夏のなればならない。肥料を準備しておいて、もし日照りがつづいたときには、水の便のよいところでは畦の溝ごとに水をやること。もっとも、水は日暮れかまたは夜分にかけること。かける水は綿に大変な薬となるもので、雨水では薬にならないのである。

施肥と手入れ



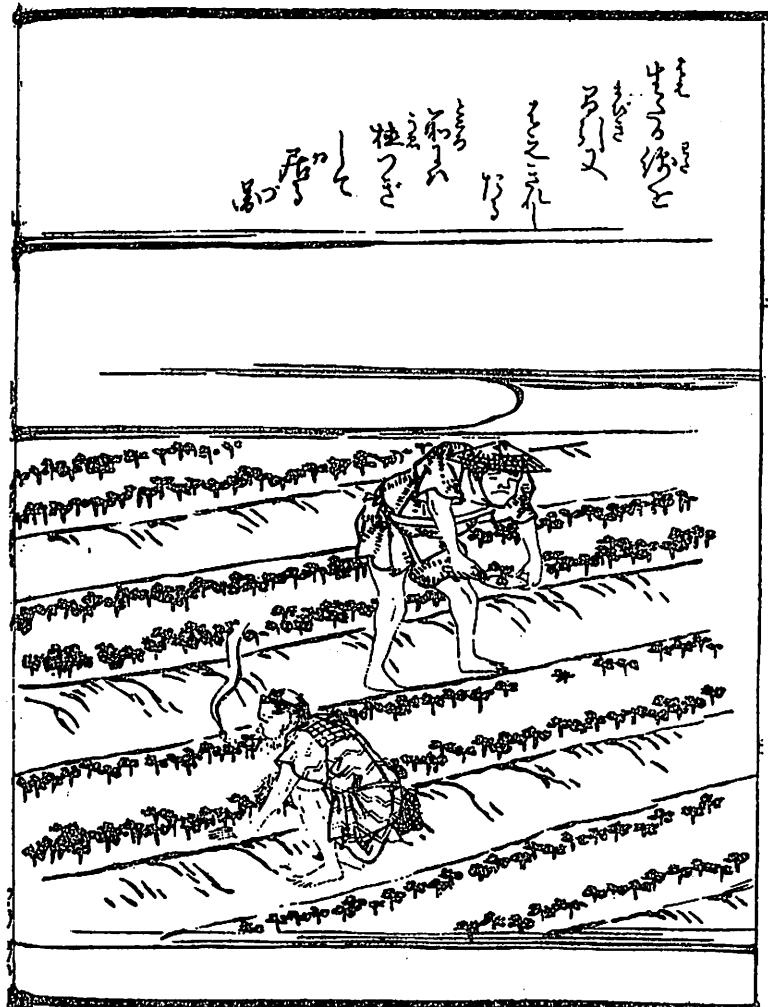
掘
おこし
小からすき
角万能 くさけつ
穴つき
すくい 同 同
底穴補
そこあなま
ハレ
図解、便利論にく



さらへ	筋切	六寸五分	一寸六分	四尺三寸	いてふ万能	づり	油揚萬能	くさけ	砂地ニ用る鋤	て見るべし	但寸法ハ便利論に	よりぬきいだす。
					鋤	鋤					綿を作るに用ふる	農具 農具便利論

取わけ綿ハ肥しの仕様にて損徳大ひに違あるものなれば、其時々の肥を油断すべからず。肥しを仕立て若旱つどかべ、水がより有所ならば、畦の溝毎に水を仕かくべし。尤水は日暮か夜分かくるやうにすべし。かくる水ハ綿に至極の葉にて、雨水へくすりにならず。

○水肥に小便をかくるにハ、いまだちひさきときハ、小便壺斗に水四斗へへかけ、成長したがひ小便壺斗に水三斗へへてかくべし。潤あればいれたる肥きく也。粉にしたる肥ハ別してうるほひなけれど、きかざるもの也。棒肥なしに半夏前にかくる伝もあり。其外其土地にて屎・燒肥(草・糞)・河泥(河のどろを小便桶にとりて夫を根におくをいふ)などを置事あり。其所により土性のかへりある事なれば、一涯にハ云がたし。南國の熱氣のつよき所ハ、泥肥(どろ土に糞をふり交くさら)・水ごえ其外冷の類ひを用ひ、北うけ・寒氣ある所にてハ、温熱のもの・焼そえなどの類を用べし。此



生たる綿を間引、
又はえきれしたる
所にハ植つぎして
居る図

心に多く用れば、必虫を生ずる事あり。ねばり氣の強き土などは、砂とこえをあへせて、地をさへやかにすべし。○中打する事始終五六へんすべし。尤草を少しも置かざるやう、生出たる時、草けづりをもてけづり取べし。○芯葉出てより、度々中うちの度毎に、次第くにうすくなるやう、凡五六寸間に奄本づゝたておくを中分とす。但石地ハ拳の出入ほどに厚くする地も有べし。又堅筋にてもよこすぢにても、一間のうちに二十本或ハ十七八本立おくべし。

○拔麦熟して刈取、又其株を起しとり、双方綿のへりをくさけづりにてけづり、棒を以て八寸程づゝに穴をつき、油粕の粉を一トつかミづゝ其穴の中へ入、土を覆ふなり。○然して綿の木草わたりの茎をわた木といふ。また五寸位にのびたる引き仕廻て引上たるをわたらがらと云時、五尺に拾本づゝのわりに残し、余ハ引捨る也。大体ハ此ごとく五の目になるやうに間引べし。はえぬ所へすぐひを以て、皆手を以て程能かるく押付て植込事也。

○拔其後中打をして、其土を右油粕置たる穴へかける也。○其後中へ筋を切クマシ屎に水を和ふなを入、糞ぶりをもつて土を寄、○其後又油粕にても干鰯にても施こすなり。是を送り肥といふ此時油かすを施せば桃の。○然して両側をけづり、土を揚る事凡三四度、晴雨のもやうによりて五六度もする事也。○土用に入て木の先の芽を留るなり。それより草あらバ引捨すべし。

○初花落て、終よせとて又両側をけづり、土を揚る也。

○縞の花ハ七月盆時分盛なる事、何國も大ていかへる事なし。此花さかりの時長雨なれば、木よくできても、木の根の土際にくさり入、又

とに少しづつ苗を間引くこと。約五、六寸間隔に一本ずつ残しておくのを通常とする。ただし、石地では、石の多いところほど多く残すこともある。また縦筋にも横筋にも、一間だ二十本あるいは十七、八本立てにしておくこと。

さて麦が成熟して刈取り、その株を起こし取り、両方の綿の縁を草削りで削る。そして棒で八寸ほどの穴を突き、油粕の粉を一握りずつ穴に入れ、土でおおうのである。

そして綿の木(草綿の茎をわた木といふ。また引き終って、引き上げたものを綿被といふ)が五寸くらいに生長したころに、五尺に十本ずつの割合で残して外は捨てる。多くのばい、……のよう(五の目)になるように間引くこと。生えぬところはすくい((三六五ページの図参照))を使って、もし五本植えるとよいと思えばすくいを五か所に挿し込み、少しねじって穴をあける。そして生え過ぎて繁っているところの

苗の根の横をななめにすくいを挿し込み、土ごとすくい取つて、あけておいた穴へ入れて手でほど良く軽く押し付けて植え込むこと。

○さてその後、中打ちをして、その土を前述の油かすを置いた穴へかける。○その後、中へ筋を引きクマシを入れ「えぶり」で土を寄せる。○その後また油粕か干鰯をやっておく。これを送り肥といふ(このとき油粕を与えると、実の皮が薄くなつてよいという)。○そして三、四回両側を削つて土をかけるが、天候によつては五、六回やる必要がある。○土用に入つたら、木の先端の芽をとめること。その後は草が生えていたら、引きぬいて捨てるなどを繰返すこと。

○初花が落ちて、最終の土寄せといつて、また両側を削り、土をあげるのである。

○縞の花は、七月の盆のころに盛りであることは、どこでもだいたい同じである。この花盛りのときに長雨がつづくと、木がよくできても、木の根の土間に腐りが入つたり、花の「ずい」がいたんだりして実り

花の薬損じて、実のり悪し。桃三ツの内一二へ
きるものと成、くづ綿となる。或ハタ立にても、
此花盛に度々ふれべ、花薬そんじて、桃のでき
悪し。綿ハ日和草とて、晴天統時ハ上作、雨多
きとしハ必不作なり。晴天統て根に水をかくる
ハ、前にも云如く薬にて、雨の度々あるハ毒な
り。此理くハしくハ前にあらはす所の、花の図
解にてしるべし。

乾巻の終

- (1) 樹肥 棒で穴をあけて施肥する。 (2) 油粕(粕) 菜種・綿実・胡麻・荏等の植物油をしぼった粕。 (3) 干糞(ほこ)
か) 肥料用の「ほしいわし」。畿内で綿に一番多く施用されている肥料である。 (4) 水肥 水でうすめた人糞尿。 (5) 腹
肥 成長した作物の根に施す追肥。 (6) 碓地 石交りで肥料分の乏しい土地。 (7) 冷の類ひ 冷は陰、湿は陽に類比して
用いられるが、必ずしも科学的ではなく感覚的に区分している。 (8) 此心に多く……生ずる事あり 以上にあいた肥料を過
剰に施用すればの意か。 (9) 五の目 「さいころ」の五の目のよろび方。 (10) クマン 永常は「尿に水を和し
たる」と注釈をつけているが、それは「水肥」のことである。未刊『家業伝』や『八尾市史』(史料編、一三七ページ)では
「クマン」は「堆肥」を指してゐるから、永常の誤闇であろう。 (11) 送り肥 追肥のこと。 (12) 木の先の芽を留る 摘
心。側枝を出させるために心を止める。温帶地方の綿作には欠くことのできない作業。 (13) 七月の盆 旧暦の七月十三日か
ら十五日まであるが、陽曆では年によつて異なり八月一〇日ころから九月五日ころまで二十五日間もある。六月以前に
閏月があると一月ほどおくれることになる。 (14) 日和草 好天統きに出来のよい草。



木末の芽を留る圖

綿の作り方に大小ある弁

綿のつくり方に上手・下手のこと

至りての砂地へ、綿の木伸あしく、小出来なものなり。然れども手入をよくし、肥を入れ、水をかくれべ、一本に桃八九より十位迄付て取收多く、真土の上地よりも利方宜し。摂津・河内辺の如く、畑毎に井戸をほり、畦毎に水を流入してハ、砂地故土に吸込、畦々へ行届なし。依て砂地へ荷ひ水にてかくる也。真土・砂真土ハ木の伸よく、枝も榮え桃十位へ付ものなれども、木数をあらく育れべ、砂地よりも利方少し。農人の上手下手にて甚得失あり。砂真土交の地に木を小ぶりに仕立、桃多く付やうにするを上手の作人といふべし。心を用ふれば、自から、妙なる所を発明して、上手になる事也。

極端な砂地では、綿の木の伸びが悪く収量が少ない。しかしよく手入れし、肥を入れ水をかけば一本に実が八、九から十くらい付いて収穫も多く、壤土の上地よりも利益が多い。摂津・河内付近のように畑ごとに井戸を掘り、畦ごとに水を流し入れると、砂地であるために吸収してしまって各畦へ行きとどかない。だから、砂地では荷ない水でかけるのである。壤土・砂壤土では木の生長が良く、枝も繁って実も十くらいは付くものだが、木数を少なくして間隔を置くと砂地よりも利益は少ない。農民の上手下手によって利益は左右される。砂壤土の混じた地には木を小ぶりに育て、実が多く付くようにする者は上手な耕作人である。綿作に心を配れば、自然と巧妙な方法を見出しても上手になるのである。

(1) 荷ひ水 水桶に入れた水を天秤棒などで、作物のそばまで運ぶこと

綿を摘む

綿摘みと乾燥

綿を取にハ、晴天にてよく吹切たるを取事勿論也。至て豊作の年ハ、十分にひらきて吹也。中作の年ハ存分にひらけず。扱さかりにふく時分ハ、一日置にとり、盛過ぎてハ三日置位に取事也。其作の多少にしたがひ、人数も多少出て取べし。先腰に籠を付けるか、前垂の両方の裙を帯にはさみ、其中へ取てハ入／＼して、蓮にて抱たる籠か、太布にて抱たる大袋、其外何にても便利よきおほきなるものを持行、夫に入、家に荷ひかへりて目方を掛、帳面に書留、其年の取高を試也。此時懸るを野取の目方と云。翌日天ならべ二三日干、曇天ならべよく干あがる迄干て、虫くひ又ハ色あしきなど撰分、実のあるより畠籠又ハ戸板などにひろげ、日に干也。晴天ならべ二三日干、曇天ならべよく干あがる迄干て、虫くひ又ハ色あしきなど撰分、実のある

綿を収穫するさい、晴天の日によく吹き切った綿を取るのはもちろんである。たいそう豊作の年は、綿は充分に開いて吹く。中くらいの年は、充分には開かない。綿の吹く最盛期には一日置きに取り、盛りを過ぎてからは三日置きくらいに取ること。そのでき方の多少によって、人数も加減しなければならない。まず腰に籠を付けるか、もしくは前垂れの両方の裙を帶にはさみ、その中へ取っては入れ取っては入れする。それを蓮で作った籠か、太布で作った大袋などその外に便利の良い大きなものを持って行き、それに入れて家まで背負って帰り、目方を測って帳面に留めて取り高を調べる。このときの目方を「野取の目方」という。翌日から畠籠や戸板などの上に広げて日に乾す。晴天ならば二、三日乾し、曇天ならばよく乾燥するまで乾し、虫くいや色の悪いものを選別して、実の付いたままで仲買か織屋へ売るのである。自家用は少量である。五歳内では耕作した家で織粉にすることは稀で、右のように実綿のままで売る。



つみたる綿を家に
持かへり。目方を懸
てゐる図。



綿を摘む
是をわたりとい